

共同研究事例発表

株式会社 廣貫堂

◆共同研究のきっかけ◆

生物工学科の榊先生、中島先生に原料や素材について相談したことがきっかけです。共同研究は取り掛かりがないと敷居が高い風に思われがちですが、そのようなことはありません。今ではコーディネーターの先生方とスタッフがフランクにやり取りを行っています。大学には当社にない施設を始め、成し得ない検証、分析方法、評価をして頂きご指導・ご協力頂いています。

◆産学連携◆

地元大学との連携は、他県からもその取り組みに理解頂けるといふ大変良い取り組みではないかと感じています。配置薬市場に留まらず、大学機関とのタイアップは検証が取れば、製品にとって多大な付加価値となり、信用と信頼、安心が違います。

◆今後の推進方法◆

共同研究の推進方法に方程式はありません。当社からの依頼だけでなく、大学の先生方からの評価や検証内容の想定や、素材の推薦を頂ければと思います。目指す姿はお客様に提供して、飲んで良かったという一言です。その姿を目指して、今後も取り組んでいきたいと思えます。



●担当教員の声● 榊教授

廣貫堂は新製品の開発に対して意欲があり、産学連携のパートナーとして最適であると感じています。研究のゴールが明確であり、本学との共同研究の成果であることが商品に提示されますから、責任も大きいですが、意欲を持って取り組むことが出来ます。

今後はより企業側の悩みや構想を伺えるようお願いする機会を多くし、製品化に貢献していければと考えております。



株式会社 生産技術

◆共同研究のきっかけ◆

コーディネーターの山田先生に研究開発のご相談をして、大島先生、松野先生を紹介頂いたことから始めました。

◆産学連携◆

元々は、ロボットを使って簡単にモノづくりが出来るようにならないかと考え、研究しておりましたが、当社単独では技術開発力が十分とは言えませんし、費用、時間を考えますと簡単に取り組むことが出来ません。共同研究は、学識者から指導を受けることによって、短期間でより良い製品を作り出すことが可能となる、大変良い取り組みであると感じています。

◆今後の推進方法◆

先生方のご指導の下、ロボット分野における可能性を共に探り、今までにない思想で新商品の開発に取り組む少しでも早く研究の成果を発表出来るよう努力していきなりたいと思えます。



●担当教員の声● 大島教授(左)・松野助教(右)

共同研究の背景には、富山県活性化を目指した生産自動化の思想、企業と大学との出会い等様々な事項が交わっています。

この取り組みは企業、大学の相互理解が必要不可欠です。互いの目標を一致させることが、意義のある取り組みへの第一歩となります。

今後はロボットの使いやすさの向上を考えた取り組みを目指していきます。



水と空気と環境をクリエイトする DAISHIN ダイシン設備株式会社

◆共同研究のきっかけ◆

卒業論文テーマに応募したことが始まりでした。当初は卒業論文テーマとして、1年間の研究予定だったものですが、特許性があり、商品化することが可能ではないかと先生方よりお言葉を頂き、共同研究を進める運びとなりました。

◆産学連携◆

研究テーマはシステムによる業務の効率化について、大きな成果を見込めるものです。そのため、社員が他の業務にチャレンジ出来る可能性が高まります。この効率化から、本来最も重要な施工・品質・サービス面で、これまで以上にお客様へのフォローを行なっていくことが出来ます。

また、数年前からIT化した入札に関しても、移動効率も加味した成果が感じられます。

◆今後の推進方法◆

現在進めている共同研究結果を現場ベースで試行し、より良い商品となるように自社だけではなく、利用する企業・業界組合グループの力もお借りし、研究を進めます。

業界の多くの方が利用できる商品となるよう、今後とも大学の先生方のご指導をお願いしたいと思います。



●担当教員の声● 松田准教授(左)・安井教授(中)・中田助教(右)

現場で使いやすい技術の開発を目的としています。共同研究を行うことにより企業に意見を頂きながらきめ細かい開発を行うことができるので、双方にメリットがあり、有意義な取り組みだと感じています。

現在まで一部試作を終えており、今後、現場で試行評価を繰り返し、使い易いシステムの開発を進めていきたいと考えています。



北陸エステアール協同組合

◆共同研究のきっかけ◆

当初より、私共が考えていた事業構想に必要であった研究テーマを県立大学の「卒論テーマ」に応募したことが始まりでした。研究の難易度が高いということでテーマに採択は頂けませんでした。共同研究を薦めて頂き研究がスタートしました。

◆産学連携◆

現在、第1段階としての成果は上がっており、技術力、研究開発費用、投下時間等の問題から進んでいなかった研究が小林先生の仮説、検証のご協力により、早期に解決することが出来たため、取り組んで良かったと実感しております。

◆今後の推進方法◆

今後、多様なデータでの検証段階へ進み、最終的に店頭で使用するソフトウェアへの組入れを目指しております。この研究成果の可能性自体もまだまだ模索段階ですので、これらを検討していきたいと思えます。また、研究協会の関わりもより良い取り組みへと繋げていけるよう、積極的な参画を行なっていきたいと思えます。



●担当教員の声● 小林准教授

この研究は企業側から要望頂き始めましたが、コンピュータ・グラフィクスをモノづくりに適用することは珍しく、興味深い事例となりました。現在、試作したソフトを、今後は実際のシステムに組み込んで検証を進めます。考えられる不安要素はありますが、現場での利用を通じて、初めて問題点が分かります。その上で、今後の方向性を検討し、ソフトの改良につなげていきたいと思えます。

